

ロールモデルを身近に感じさせる探究学習で、「実行力」「自走する力」を育む

石川県立金沢泉丘高校いずみがわか

石川県立金沢泉丘高校では、同校の教育目標を体现する生徒の姿を教師たちが語り合う中で、「実行力」と「自走する力」を、育成を目指す資質・能力の中核に定めた。そして、それらの「見えない力」を生徒が発揮する教育活動として探究学習を重視し、教師はその支援に注力している。

探究学習の成果を踏まえた育成方針を掲げる

全国屈指の進学校として知られる石川県立金沢泉丘高校。2003年度からスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定校として、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成に努めている。また、15年度からの5年間はスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）として、グローバルな社会課題について多面的に考え、多角的に行動する力を備えた人材の育成に取り組んできた実績を持つ。

同校は理数科と普通科を設置し、普通科は2年次からSGコースと普通コースに分かれるが、どの生徒も、社会課題に関する探究学習や科学的な探究

学習にそれぞれ取り組んでいる。普通コースの探究学習はこれまで1単位であったが、23年度からはSGコース、理数科と同じ2単位とした。それは、SSHとSGHの2つの事業で培った指導ノウハウを、探究学習を媒介に普通コースにも波及させるためだ。

そうしたことが地域にも周知され、近年は、東京大学や京都大学などの難関大学を目指して学習に励むとともに、探究学習にも熱心に取り組む生徒が集う学校として知られるようになってきたと、SSH推進室主任の井川健太先生は説明する。

「本校はSSH、SGHの研究成果を踏まえて、グローバルリーダー、スペシャリスト、チャレンジスピリットを生徒育成の方針として掲げていま

す。その実現のためには、教科学力という『見える力』はもちろん、社会をよりよく動かし続けるための『見えない力』も必要です。『見えない力』を育むための重要な場として、探究学習が機能しています」

生徒の姿を語り合う中で資質・能力を明確化する

同校の生徒会のウェブサイトでは、学校が特に力を入れている教育活動として、探究学習に言及している。探究学習を通して身につけることができる資質・能力について、生徒会の生徒たちは「主体性や実行力、計画力、コミュニケーション能力、論理的思考力など、多くの能力」を挙げているが、それら

はまさに、同校の教師たちが高校生活を通じて生徒に育みたいと考えている力と同じだと、井川先生は語る。

「今年度の学校経営計画書では、中・長期的目標の中に、育成を目指す資質・能力として『実行力』『自走する力』を明記しています(図1)。それは、本校ではどんな生徒を育てたいのか、私たち教師が話し合った末にたどり着いたキーワードです。生徒会の生徒たちが挙げる『主体性』『計画力』は、中・長期的目標の中の『自走する力』と同義だと思っています」

「実行力」「自走する力」は、主に若手教師が日々生徒と接する中で感じていたことを言語化したものだ、SGH推進室の北村仁志先生は振り返る。

「中・長期的目標をより具体化しよ

なぜ育む? 「見えない力」

うという井川先生の呼びかけにに応じて、若手の先生と、この学校でどんな生徒を育てたいか、生徒や教師がリーダーと認識する生徒が備えている力は何か、授業、探究学習、部活動など、様々な場面を思い浮かべながら、語り合いました。例えば、教科書の記述をうのみにせず、『もつと別の説明が



SGH推進室主任
井川健太
いかわ・けんた
同校に赴任して7年目。理科(物理)。



SGH推進室主任
鈴木達也
すずもり・たつや
同校に赴任して12年目。英語科。



SGH推進室
北村仁志
きたむら・ひとし
同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科(世界史)。

学校概要

設立 1893(明治26)年
形態 全日制/普通科、理数科/共学
生徒数 1学年約400人
2023年度卒業生進路実績 国立大は、北海道大、東北大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京工業大、東京大、一橋大、富山大、金沢大、福井大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに211人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ229人が合格。

図1 24年度学校経営計画書に掲げる中・長期的目標

本校教職員からなる「チーム泉丘」は、変化の激しい社会における答えのない様々な課題に協働して立ち向かう**実行力**、本当にこれでよいのかと様々な角度から探究心を持って思考し、自分の考え・想いを語る力を積み重ね、ひいては一人ひとりの夢、目標に向かい**自走する力**を、生徒に育成する。この実行により、社会に貢献するリーダー、他者を思いやることのできる人材を輩出する学校、全国一の魅力ある公立高校になる。

※学校資料を基に編集部で作成。

必要ではないか』などと、自らより深い追究を求める生徒や、自分が取り組む探究学習に対して研究者などからアドバイスをもらい、それをヒントに自分の取り組みを多角的に検証する生徒など、私たちが日々接している生徒の行動を振り返る中で、『実行力』『自走する力』というキーワードにたどり着きました」

SGH推進室主任の鈴木達也先生は、『実行力』『自走する力』という言葉を具体的な生徒の姿でイメージしたことに大きな意味があると考える。「抽象的な言葉の共通理解を図るため、学校経営計画書の記述をもつと細

「見えない力」を備えた生徒の姿を見る

かくするといった方法も考えられませんでした。しかし本校は、あくまでも一人ひとりの教師が、それぞれの授業などで出会った生徒の姿を通して共通理解を図る方法を選びました。育成を目指す資質・能力である『実行力』『自走する力』が、それぞれの教師の中で具体的な生徒の姿としてイメージできたことで、日々の指導につながられるようになったのだと思います」

「実行力」「自走する力」という資質・能力を育む上で、ロールモデルとなる生徒の姿を校内の生徒や教師が共有することを同校では重視している。

「SSHやSGHを通して探究学習の経験が蓄積されている理数科、普通科SGコースでは、ロールモデルとして共有したい生徒の姿が頻繁に見られます。私たち教師は、ロールモデルとなる生徒の言動を全校の生徒にも積極的に紹介し、校内全体に『実行力』『自走する力』を発揮した取り組みを波及させています。また、本校の探究学習は、全学年同じ時間に実施するようにしているため、その時間は、生徒はほかのクラスの生徒や他学年の教師に相

談したり、質問したりに行くことができます。探究学習は校内のたくさん仲間から気づきを得る学びだという空気感をつくるのが大切なのです」(鈴木先生)

「実行力」「自走する力」を探究学習の中でどれだけ発揮することができたかを、生徒が他者に向けて披露する場が、3月に1日かけて実施される「探究の日」だ(P.18図2)。普通コース、SGコース、理数科それぞれの代表チームの探究学習の発表を聞いたり、学年やクラスの枠を超えて生徒が自分の取り組む探究学習について語り合ったりする行事で、その運営の大半を生徒が担当する。

「探究の日」には、教師が「実行力」「自走する力」を発揮した生徒の姿をのあたりにするとともに、これからの高校生の成長には探究学習が必要不可欠であり、その学びを支援する力はずべての教師に求められるものであることを実感してもらおうというねらいもあると、井川先生は言う。

「ペーパーテストでよい成績が取れる生徒を育てるのであれば、授業で演習を繰り返せばよいでしょう。しかし、そうした指導しかできない教師には、本校の生徒はついてきてくれません。「探究の日」において、生徒の様子を

図2 「探究の日」のプログラム

トップモデルを知る(125分)	2年生代表チームのモデルプレゼンテーションと質疑応答。3年生も講評に参加する。
アイスブレイク&交流(60分)	学年・クラス・文理を混ぜた混成グループで活動する。
探究成果を全班がプレゼン(60分)	1年生は、各自が「2年生で行う探究活動のテーマ」について発表。 2年生は、各自が「2年次の探究内容」について発表。
学びを対話(ダイアログ)で振り返る(70分)	前半は、学年・クラス・文理を混ぜた混成グループで活動する。各自が「1年間の取り組み」について内省・発表し、互いに助言、質問、感想を述べ合う。 後半は、自分のHRで活動する。各自が「本日の取り組み」について内省・発表し、互いに助言、質問、感想を述べ合う。



※学校資料を基に編集部で作成。

見ることで、これからの教師に求められる力を改めて確認しているのです」
同校のような進学校が、「見えない力」が求められる探究学習の発表に丸一日を使うことに大きな意味がある」と、北村先生は考える。

「午前8時から午後3時までを費やすことを通じて、生徒も教師も、自校では探究学習が重視されていて、『実行力』『自走する力』などの資質・能力の育成を目指しているということ

実感するはず」

生徒が「実行力」「自走する力」を發揮した探究学習の事例を、北村先生、井川先生は次のように説明する。

「文系の普通コースの生徒たちが実験を行い、データに基づいた社会実装を目指すなど、理系の視点も大切にして探究学習に取り組むケースがいくつも見られました。例えば、馬の厩舎（きやうしや）で寝床として活用する敷料（しきりょう）について研究したチームは、大学の馬術部にインタ

ビューを行い、実態を把握した上で、放置竹林や廃タイヤから原料を得た敷料を開発するための実験を行うなど、多角的で文理融合の探究学習に取り組んでいました」（北村先生）

「探究学習の校外発表会で京都に行くことになった生徒たちが、日帰りではなく、泊まりがけで行きたいというので、理由を聞いたところ、『大阪に会ってみたい研究者がいる』『時間がつくれそうなら、面会のアポ取りをする』と云うのです。先輩たちの探究学習の様子を見て、やりたいことはどんどん『実行』『自走』してよいと理解しているのだと思います」（井川先生）

「見えない力」を育む授業を模索

「実行力」「自走する力」などの「見えない力」がどの程度生徒に身についたのか、評価についても同校は模索してきた。理科では、ルーブリックを作成し、生徒自身が探究学習の中で自分の成長を自覚できるようにしている。また、普通科では、教師が生徒の活動の振り返りに目を通し、一人ひとりの成長を見取っている。

「客観的な評価も大切ですが、生徒が今後どのような自分になりたいのか

を考えることが、より重要なのだと思います。例えば、ある2年生の探究学習の発表を『実行力』に留意して聞いた時、1年生のAさんは、『既存の方法にとらわれないアイデアを実行する力を伸ばしたい』と思い、Bさんは、『周囲を巻き込みながら実行する力を身につけたい』と思うかもしれません。ひとくちに『実行力』と言っても、イメージすることは異なっており当然です。生徒の振り返りに目を通してながら、それぞれが伸ばしたい力を言語化できるように、面談などで支援しています」（北村先生）

探究学習を通じて「見えない力」の育成の土壌が校内に醸成されたからこそ、同校では教科の授業中での「実行力」「自走する力」の育成にも今後は注力していく考えだ。

「教師から与えられた課題にきちんと取り組んでいるかといった表面的な見取りではなく、間違えた問題をどのように解き直したのかなど、生徒の思考のプロセスにおける資質・能力の発揮を見取っていきたいと思っています。探究学習も教科の授業も、生徒が考えなくなる時間とすることが重要ですから、『実行力』『自走する力』の育成の視点からの授業改善を目指す研究授業も充実させていきます」（井川先生）